

## 帖木兒大王

### 一 序 言

亞細亞大陸の中でも露領中央亞細亞の地方は、吾々日本人にとつては最も縁遠いものゝ一つであらう、此の地方に崛起した英雄帖木兒の傳を極めて手短かに敘するといふことは、筆者には左程容易の業ではない、それは簡單なる敘述によつて甚だ縁遠い事柄を、成るべく明らかにしたいとするからである。かゝる目的の爲には、勿論事細かしい考證などに入ることは出来ぬ。またその一生を通じての長々しい年代記やうのものも避けねばならぬ。割合に耳新らしいと思ふことを拾ひ集めて普通に知れ亘つて居ることを補ひ、それで此の英雄の一面を少しでも多く寫すことが出来たならば満足しなければならぬ。始めに此れ丈けのことを斷つておいて敘述に入らうと思ふ。

### 二 帖木兒の家系

帖木兒の生れたのは西洋紀元千三百三十六年、日本では丁度新田義貞が鎌倉に撃ち入つて、高時に詰腹を切らせた年である。父の名はツラカイと傳へられて居る。中亞に名高いサマルカンドの町の南の方、ケシュといふ町で生れたのであつた。今は緑の町なる意味でシャリ・サブズと呼ぶるゝ所である。曾ては蒙古族として傳へられて居つ